

Title	<紹介>鈴木亨著『近世前期文学の主題と方法』
Author(s)	浜田,泰彦
Citation	語文. 2010, 92-93, p. 126-127
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69146
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

鈴木亨著『近世前期文学の主題と方法

浜田泰彦

合─」)全三部三十本を収載する。 表された論考及び講演録(「憂き世と浮き世─価値観の対立と融本書は、鈴木氏の一九五八~二○○五年の約半世紀にわたり発

の主要部分となっている。第一部「仮名草子の思想史的探求」は全体の六割を占め、本書

かった」(一九四頁)傾向にあったと指摘し、思い込みを排除し、の対象となり、同時にそれが作品研究の基礎認識となることが多な体として把握されず、特定の部分がその作品の本質として分類類研究に主眼が置かれてきたが、氏はその弊害として、「作品はど多様な要素を有する作品群であるために、作風や内容による分ど多様な要素を有する作品群であるために、作風や内容による分ど多様な要素を有する作品群であるために、作風や内容による分がった」(一九四頁)傾向にあったと指摘し、思い込みを排除し、

作品本文に精緻な読解を試みる姿勢で一貫している。

(『祇園物語』小考」)。また、『二人比丘尼』が『曽我物語』巻十すると、思考態度の違いから比較する図式に置き換えている的に考え」、「その思考が不可知論的な範囲まで展開」(三〇六頁)がに考え」、「その思考が不可知論的な範囲まで展開」(三〇六頁)がに考え」、「その思考が不可知論的な範囲まで展開」(三〇六頁)がに考え」、「その思考が不可知論のない。「一位で表現のに表した。「一位で表現のででで表現のでは、「一位で表現した。」という対立図式で把握されがちな画致論で反駁した『祇園物語』という対立図式で把握されがちな画を表示を表現した。「一位で表現の語』に対し、信仏一たとえば、通常排仏論を標榜する『清水物語』に対し、儒仏一たとえば、通常排仏論を標榜する『清水物語』に対し、儒仏一

想」)は、いずれも氏の精緻な読解にかかるものだと言える。そ徳観との中道をはかっているとの指摘(『為愚痴物語』の中道思道修行と両立するという論理で、当代の商業資本主義と旧来の道『為愚痴物語』が蓄財を容認し貪欲に堕することさえなければ仏借りているとの典拠の指摘(『曽我物語』と『二人比丘尼』」)、一〜十二で死んだ夫を弔って妻が出家するストーリーの骨組みを一〜十二で死んだ夫を弔って妻が出家するストーリーの骨組みを

世之介」・「青年期の世之介」の二論考では、第一部と同様、性的続く第二部「井原西鶴諸作品の考察」においても、「少年期のあげた諸論考でも、氏の鋭利な読みの成果が提示されている。

『可笑記』・『竹斎』・『浮世物語』・『一休咄』・『あだ物語』をとり

の他紹介しきれないが、『恨の介』・『薄雪物語』・『仁勢物語』・

な早熟を見せる世之介の少年期から、現実的問題に対峙すること

として、『為愚痴物語』の介在を指摘したのも、氏が仮名草子作題とするはずの『日本永代蔵』において、養生論が頻出する理由び『「ほれぬ」という誓紙」)。「西鶴の養生の理念」で、致富道を主避興の「かぎり」を知って留まるという主題を新たに提出する無は異見のたね」(巻一ノ二)の詳細な分析を通して、従来の遊紙は異見のたね」(巻一ノ二)の詳細な分析を通して、従来の遊になる青年期まで『好色一代男』巻一〜二の各話の分析検討を詳になる青年期まで『好色一代男』巻一〜二の各話の分析検討を詳

の文反古』巻四ノ一「南都の人が見たも真言」、巻三ノ二「明け一方で疑問の残る論考もあった。「西鶴の改作方法」では、『万

品を精読してきた成果の一つであろう。

を行われていることを掲出すれば充分であろうか。 「種造の展開」)等微細な表現も疎かにしない鋭い読解がここで が、『菅原伝授手習鑑』四段目切「寺小屋」で、松王が ところだが、『菅原伝授手習鑑』四段目切「寺小屋」で、松王が ところだが、『菅原伝授手習鑑』四段目切「寺小屋」で、松王が ところだが、『菅原伝授手習鑑』四段目切「寺小屋」で、松王が ところだが、『菅原伝授手習鑑』と、時代やジャンル区分 表後に第三部「研究余滴」では、『万葉集』・『三人法師』・『去 われる。

《和泉書院、二〇〇八年八月、六一〇頁、一五,七五〇円)

(はまだ・やすひこ 本学大学院博士後期課程)

した一書であった。

かかわらず、正確な本文理解は普遍のものであると、改めて感服

る。時間が経過し、研究動向もさまざまに変化してきているにも

冒頭に紹介した通り、本書は約半世紀以前の論考を掲載してい